

# 資料渉猟余話

その52

郷土資料を中心に4年、長野県師範学校を卒業。上飯田、飯田、中村などの各小学校で教鞭をとったあと大正9年、織物業・若松屋(飯田市座光寺)活動社員として郷土誌「伊那」の整理を担当しているうちに、「伊那」の前身の「はたの友」を創刊した林栄の業績を顕彰する必要があると感じた。

林栄は明治22年7月18日、上飯田村で生まれ、飯田中学(中6回卒)を経て明治44

和13年9月15日発行の第11号で終刊とし、同年11月、「伊那」と改題、本格的な郷土誌として再スタートさせた。「伊那」はその後、山村書院の山村正夫が経営を引き継いだり、

8月、市村威人らの勧めにより、当時南信時事新聞の編集長としていた初代原田島村が編集主幹となり復刊。月刊郷土誌として現在まで誌齢を重ねている。林は昭和57年5月11

## 郷土誌「伊那」

### 生みの親の林栄

平沢 忠明

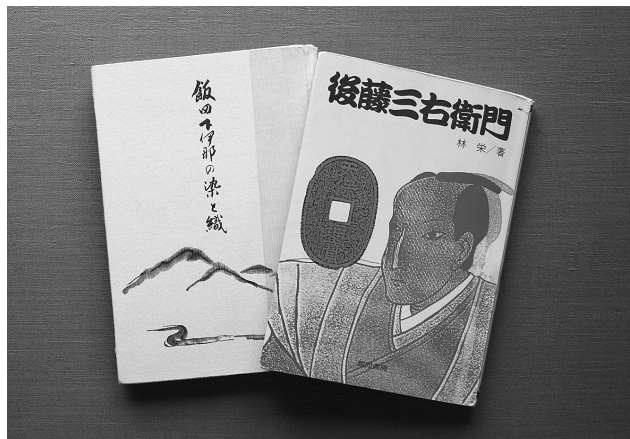
下伊那教育会内にあった伊那郷土史学会に編集が移管されたりした。昭和19年3月、戦時状況下の出版統制や用紙不足から195号で廃刊となった。「伊那」は昭和27年



林栄  
(飯田市曙町、林政明さん提供)

林は、江戸の金座御金改役で天保の改革の犠牲者として史上に名前を知られる後藤三右衛門(生家が飯田大横町の元結問屋若松屋)の遠孫。著書「後藤三右衛門」は、林が「子孫として後藤三右衛門の刑死の疑問を晴らすために、伝記をまとめた」と80歳余で

書き遺した原稿を死去後、当時信州内報社主幹の熊谷重一らが大横町の協力を得て出版したものだ。熊谷は、大正2年から3年間、上飯田小学校で林が担任した教え子。熊谷ら教え子は林の生前、林を囲む同窓会「林栄会」を設け、



林栄の著書 (南信州地域資料センター所蔵)

毎年開催していた。林は教え子たちに慕われ、全国に誇る郷土誌の生みの親として、取上げておきたい人物であった。